



子育てチャンネル

終わりになき関係

子供たちは3人とも成人しているが、親子の関係は大きく変化することもなく続いていく。

思い返してみると、子供たちにはどれだけ楽しませてもらったことが。長い間元気を分けてもらい、時には心配もしたが、思い出すのは楽しいことばかりのような気がする。しかし子供たちがみな自立しているわけではない。大学に行きたいといえは無理をしても行かせたいと思うのが親心なのだろうか。下の娘も春には卒業で、就職も内定したと聞いて少し気が抜けた。

子供のためとはいえ、借金まですて仕送りをする自分の姿と、そんな私のことを気にかけてくれる函館の年老いた父の姿が重なって見えてくる。私自身は、とっくに自立しているつもりでも、父にとっではいまだに気がかりな息子

の一人に過ぎないのだ。おそらく私にとっても、子供たちは何十年先までも気がかりな存在であり続けることだろう。

キツネの子育てにおいて、年上の子が下の子たちの世話をすることが知られているが、それは一時的なことに過ぎないという。親子の間に長期に渡る関係を築けるのは限られた一部の動物だけなのだ。

「子育て」というのは、親から目線、言葉のように思えてならない。私自身を振り返ってみれば、子供たちに育てられたようなもので、父親らしくなれたのも子供たちのおかげといわざるを得ない。子供たちにえらそうなことを言える立場ではなく、五分と五分の関係というしかないような気がする。

い。人間は自ら成長することを止めない限り、成長し続けることの出来る存在なのではないだろうか。

そうは言っても、人間の歴史を見る限り、精神的な成長よりも武器の進歩のほうがはるかに早く、今だに紛争が収まらないのはどうしたことなのだろう。人間を救うためにあるはずの宗教が自らの正当性を主張し、他の宗教を否定し始める時、争いが始まる。

親子の間にそのような関係があれば、親密さは失われてしまっだろう。親が子を否定する時、子供はどうしたらいいか分からなくなってしまうに違いない。自信を失うか、反感を抱くようになってしまいかもしれない。否定するのではなく、同意しないということならどうだろう。「違う」と断定しないで、「私にはそう思えないの

だが」というような態度だ。誰にも持って生まれたものがあり、それはなかなか変えられないものなのだから。

親子の関係はまだまだ続いていく。急ぐことなどない。私の父は86歳にして今も成長を続けているようだ。最近では長老の風格さえ漂わせており、その先は神仏の世界しかない。

人間だけが持つ、時を越えた世界観だけが、われわれに許された「終わりになき関係」を可能にしているのかもしれない。死後も続くであろう終わりになき関係のことを、われわれは絆と呼んでいる。家族の絆だ。

「大雪山ネイチャーガイド」

塩谷秀和